【特別講義要旨（4）'96.11.26】

現代人口論争
――修正主義の正統派批判――

岡　田　　實
（中央大学経済学部教授）

はじめに

人口論争における正統派 orthodoxy と修正主義 revisionism

§1. 戦後人口論争の系譜

1940 年代：Kirk, Notestein, Davis, Thompson 等は人口転換論を形成。出生力をそのコントロールの技術，知識よりも子供をもつ動機から説明。

1950 年代の半ばから 60 年代：Davis（1954），Hauser（1958）が新マルサス主義―正統派の立場を表明。経済，社会の開発に人口増加率の抑制は必要条件。W. Vogt『生き残る道』(1948)，K. Sax『空席はない』(1955)。

新マルサス主義復興の背景　(1)人口要因　(2)社会，経済事情

ゴッドウィン・マルサス論争の再現。新ゴッドウィン主義―マルクス主義の楽観論。L. Meek『マルサス批判』(1953)，J. de Castro『飢餓社会の構造』(1952)，『飢餓の地政学』(1951) 飢餓は誤った社会組織に起因。国連人口委員会。ソ連代表の発言（1947）

楽観的陣営：カトリック，共産主義者，回教徒

悲観的陣営：アングロサクソン，プロテスタント，富める層，保守層

1970 年前後から人口論争の新局面

P. Ehrlich『人口爆弾』(1968)，ローマクラブ『成長の限界』(1972)，人口と経済のゼロ成長の提案。50 年代新マルサス主義との相異。人類の生存の危機を途上国の人口爆発だけでなく先進国の生活類型に着目。1974 年，国連主催，ブカレストの「世界人口会議」静止人口を目ざす。途上国人口転換論の立場から反対表明，東西対立から新たに南北の対立。新たなアンチ・マルサス主義。

戦後の国連の態度：1961 年まで非干渉，1962 年 BC を希望する国への避妊のための援助，スウェーデンが提案，非干渉の原則消滅。1965 年ベオグラードの会議で干渉の指示へ。1969 年国

連活動基金 UNFPA の創設。

1970年代後半：正統派思想の沈滞，その背景。人口と経済のゼロ成長→経済不況，失業，貿易赤字，高齢化。家族計画の普及→出生率の低下。食物生産の順調な発展と飢饉の回避。

1980年前後の新たな運動

(1) アカデミックなマルサス研究の勃興

(2) 楽観的修正主義思想の抬頭

(1) Patricia James, W. Petersen, A. Chase, J. Dupâquier, INED『初版人口論訳』。マルサス復興の意味：読売新聞1984年6月15日。夕刊。文化欄―途上国の過剰人口，先進国の減少人口の恐れという2つの相反する人口問題の解決を求めたアカデミックな運動。その研究成果。

(2) 修正主義の楽観論，代表者 Julian Simon『究極の資源』1981年。P. アーリックと『成長の限界』の悲観論批判。

アーリックの悲観論（正統派）とサイモンの楽観論（修正主義）の学説史的背景

㋑ アーリックの先駆者。Philip Hauser（1958），K. Davis（1954）。新マルサス主義の立場から人口問題の論議に積極的に参加。世論の形成に貢献。理論的には Coale と Hoover（1958），そして Enke（1963）はその人口・経済モデルで，人口成長が経済・社会開発に対しマイナスの効果→『人口爆弾』（1968）。

㋺ サイモンの先駆。Ester Boserup（1965），Richard Easterlin（1967）。Simon Kuznets（1967），Alfred Sauvy など。A. Marshall と J. M. Keynes, Hansen。仏の社会学者。Coste, Durkheim，ボーズラップ：人口成長と経済成長に果たすプラスの役割（収穫逓増），イースターリンとクズネッツ：人口成長と経済成長間に明白な相関の欠如。ソーヴィ：人口成長と1人あたり所得，教育水準，死亡率，住宅建設等との間にマルサス主義の命題は誤り。（戦前，戦後の先進国，戦後の途上国の経験）。コスト，デュルケムは人口増加を積極的に評価。

上述のような人口と経済の相関に関する思想史上の発展に加え，70年代の人口，経済事情は正統派の主張に疑問を提示。ここに修正主義が抬頭。

1980年代の修正主義：J. サイモン『究極の資源』1981年。Samuel Preston（1987）。イースターリン，クズネッツの命題を経済的に確認。Paul Schultz（1987）は国民所得に対する教育投資の割合と年齢構造や人口成長との間に明確な関連を否定。

正統派の高出生力と低貯蓄率の仮定に対し A. Kelly（1973）と A. Mason（1988）は，もっと複雑な相関を実証 Hodgson（1988）。

1980 年代後半：地球規模の環境問題。オゾンホール，生物種の多様性，CO_2 放出と地球温暖化。その人口増加との関連。1992 年，リオ「環境と開発」の国際会議。

1990 年代：論争の復活 P. アーリック『人口問題』(1990) 変わらない信念を主張。エルベ・ル・ブラ『地球の限界』(1994) ソーヴィ思想を継承—その人口史的背景。

論争の和解を求めて：Nathan Keyfitz「人口成長：誰がその限界を測定できるか？」(1994)。

§2. 人口と食料

P. アーリック『地球の治療』(1991)，地球の人口扶養力，アメリカ並で現在人口の半分。環境悪化，来世紀初め 10 億人以上が飢えて死ぬ。「食料の安全，人口と環境」(1993) 過去 20 年間で 2 億の人間が飢えで死亡。

Sauvy, mondes en marche (1981), L'Europe submergée (1987)。FAO 事務局長 R. Sen の 1965 年の悲観的発言の誤り。それから 1 世代経過した今日，人口は 50%増，食料は若干改善。J. Simon『究極の資源』で 1948〜1979 年，食物供給は改善。その原因，人口増加→食物需要増→耕地の集約的利用，農業技術の進歩ならびに潅漑用地の増加→収穫増→少ない耕地でより多数の人口の扶養。

マルサスの単純な思想，人口増加は収穫漸減を導くという思想は間違い。食料生産増大の条件：自由な市場機構，農産物の私有を保証する社会組織。

Hervé le Bras『地球の限界。自然と人口の神話』執筆動機，オゾン層の縮小，気候の温暖化，自然資源の涸渇，貧者の飢え，これらの原因は人口増大か？

レスター・ブラウン『世界の状況』(1993)，27 カ国語に訳書，1950〜84 年穀物生産：3%，人口：2.2%。1984〜1991 年穀物：0.7%，人口：1.7%。農業生産の飽和状態。ル・ブラの批判：数字の利用に注意。1983〜90 年の場合，穀物：2.7%，人口：1.7%（低い生産の年から高い生産の年)。長期的には穀価低下。(小麦と米の価格の推移 p.143)。

§3. 人口と自然資源…エネルギー

サイモン：『成長の限界』→自然資源の涸渇。その限界は常に克服されてきた。明日も同様。エネルギー問題。エネルギーの需要の増加→稀少性とコストの減少。この傾向の継続に疑うべき統計的根拠なし。その一時的騰貴，市場メカニズムの作用を通じ，代替エネルギーの開発。長期には生活水準に影響なし。

ソーヴィ：18 世紀の木材不足と石炭の利用（Jevons, Coal question の主張とサイモンの反論)。自然資源涸渇の地平線は，常に遠ざかる。

ル・ブラ：過去 50 年間の石油の貯蔵量と消費の大きさの統計値。貯蔵量：1939 年，42 億ト

ン，75年950億トン，92年1380億トン。貯蔵は常に消費量の25倍〜33倍で推移。貯蔵量は技術と費用に依存。(投下費用は利益を前提)。

§4. 人口と環境

サイモン：自動車の排気ガス，騒音，廃棄物等に注意深い観察が必要。しかし近代工業文明の影響を要約した指標：平均寿命は改善。人口増加は環境の汚染，公害を短気には増大するが，長期には追加的人間は公害を減少させる技術を生み，公害と戦う財源を供給。

ソーヴィ：温暖化，酸性雨，森林の消滅について。CO_2は（図p.37，1987）のように増加。1979年のストックホルムの会議：気候の変化を生む可能性の報告。ただそのとき危険な水準，気候変動の性格は不明。

ソーヴィ：酸性雨の被害は明瞭。途上国の森林伐採は気候の変化を生むか？　FAO（1981）の調査：熱帯地域全体でみて森林地帯の減少は全体の0.5%にすぎぬ。ただし限られた地域で深刻な事情。

ル・ブラ：オゾン層の縮小は何百万人の死者を生むか。地球温暖化はCO_2放出とその蓄積の結果か。温暖化は農業の生産分布を変え，また海水位の上昇で何億人を溺れさせるか。(レスター・ブラウン『世界の状況』1993年)。

(1) ル・ブラの反論：皮膚癌には良性と悪性。黒色種の発生率が問題。ル・ブラの計算方法によると，1年でアメリカで720人，フランスで100人しか増えない。何百万人と大差。誇張した発表の理由。その効果はなお不詳。ただCFC（フロン）の生産に注意。

(2) CO_2放出と地球温暖化：海水位，過去数百万年の推移からみて2050年に2度の上昇→30—50センチ上昇。温暖化と農地の分布。人間の適応能力に着目。ロッキー山脈のレモン栽培→メキシコとアメリカ中部へ移動。1987年の水温変化とアンチョビの水揚げ量減少→ブラジルの大豆栽培（家畜の飼料)。

(3) 人口密度とCO_2放出は逆相関。ブラジルとバングラディシュの比較（植物起源のCO_2放出のため)。

(4) 東西南北のCO_2放出の比較。東は西の2.5倍，北は減少傾向。南は増加の傾向。しかし北はCO_2放出の4分の3。南の国の人口ゆえの被告席は誤り，人口抑制は温室効果抑制の1つの手段。北のエネルギー消費の抑制が問題。

§5. 楽観論の評価

3者の楽観論に微妙な差異

〔I〕 批判点：(1)サイモンは長期に良くなるというが，世界の何億の貧民にとって短期こそ問題。(2)人口増加とともに所得の購買力と比べた自然資源は相対的に安くなる。消費財を含めた場

合や途上国の不熟練労働者の賃金とくらべるとサイモンの判断は誤り。(3)社会資本が労働力の増加と正の相関を持つというが，途上国では人口成長にみあった投資は困難（バングラディシュなど)。

〔Ⅱ〕 メリット：(1)人口だけが地球規模の問題の唯一の原因でないことを明らかにしたこと。(2)世論が新マルサス主義の一方的情報に偏っている領域でサイモンの勇敢な挑戦は世論のバランスの回復に貢献。人口論議をより反省的な方向に導き招来の政策に役立つ。

〔Ⅲ〕 マルサス理論の交渉：サイモンもル・ブラもマルサス人口論を初版と2版以降のものを区別。道徳的抑制を導入した2版以降，人間の理性による情欲のコントロールに着眼，人間は動植物のように増殖せず，したがってパール・リードの実験のように人口は増えず，したがって初版の人口論に基づき人口の幾何級数的増大と貧困，罪悪に必然性を説いた悲観主義の主張は誤りと。サイモンは人口圧力から知識，技術進歩，経済発展を説き，ル・ブラは人口増加は人間精神の高尚と肉体の改善，必要に基づく勤勉と経済・社会の進歩を語るマルサスの初版に言及。

〔Ⅳ〕 論争のゆくえ：Nathan Keyfitz「人口成長：誰がその限界を測定できるか？」1994年，経済学，生物学双方の学問の根源，性格の相違に求める。

〈追加文献〉

[1] Simon, J. L. (1992) Population and development in poor countries, Prinston Univ. Press.

[2] Ehrlich P. R. & Ehrlich C. D. (1993) “Food Security. Population and Environment” P.D.R. vol. 19. no. 1

表1 世界人口の推移

	推計人口（百万人）	年平均増加率（%）	年平均増加数（万人）
1800	960		
1900	1610	0.58	710
1950	2516	0.89	1812
1960	3019	1.90	5030
1970	3697	2.05	6780
1980	4453	1.88	7560
1990	5295	1.75	8420
1995	5759	1.69	9280

表2

	地域別推計人口（百万人）				年平均増加率（%）		
	1950	1970	1990	1995	1950～70	1970～90	1990～95
世　界	2516	3697	5295	5759	1.94	1.81	1.69
先進国	832	1049	1211	1244	1.17	0.72	0.54
途上国	1684	2648	4084	4515	2.29	2.19	2.03

表3

	地域別増加数（百万人）			年平均増加数（百万人）		
	1950～70	1970～90	1990～95	1950～70	1970～90	1990～95
世　界	1181	1538	464	59.05	76.9	92.8
先進国	217	162	33	10.85	8.1	6.6
途上国	964	1436	431	48.2	71.8	86.2

参照文献

[1] Ahlburg, D. A. (1987) "The impact of population growth on economic growth in developing nations: The evidence from macroeconomic-demographic models," in Johnson and Lee.

[2] Blanchet, D. et Horlacher D. E. (1991) éd. Conséquences de la croissance démographique rapide dans les pays en développement, INED, Paris.

[3] Boserup, E. (1965) The Conditions of agricultural growth, London. Allen & Unwin

[4] _____., (1981) Population and technological change; A study of long term trends, Univ. of Chicago Press.

[5] Brown, L., et al. (1993) State of the world, W. W. Norton, N. Y.

[6] Chase, A. (1980) The Legacy of Malthus, The Social costs of the new scientific racism. Univ. of Illinois Press.

[7] Clark, C. (1967) Population growth and land use, Macmillan, London.

[8] Coale, A. & Hoover E. M. (1958) Population Growth and Economic Development in Low-Income Countries, Prinston Univ. Press.

[9] Davis, K. (1991) "Population and resources; facts and interpretations" in Resources, environment and population, Davis, K. et Bernstam M. S. ed. Oxford Univ. Press, N. Y.

[10] _____., (1945) "The world demographic transition", Annals of the American Academy of Political and Social Science 237.

[11] _____., (1954) "Fertility control and the demographic transition in India," in the Interrelations of Demographic, Economic and Social Problems in Selected Underdeveloped Areas. New Work: Milbank Memorial fund. pp.66−89.

[12] Dupâquier, J. (1983) Malthus-Past and present, Academic Press.

[13] Easterlin, R. A. (1967) "Effects of population growth on the economic development of developing countries" Annals of the American Academy of Political and Social Science 369.

[14] Ehrlich, P. R. (1968) The Population bomb. ポール・R・エーリック，宮川毅訳『人口爆弾』河出書房新社，1974年。

[15] Ehrlich, P. R. and Ehrlich A. H. (1990) The Population explosion, N. Y. Simon and Schester，水谷美穂訳『人口が爆発する』新曜社，1994年。（書評；河野稠果『世界と人口』1994年，9月号）。

[16] _____., (1991) Healing the planet, Addison-Wesley, Readings, Mass.

[17] Enke, S. (1963) Economics for Development. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.

[18] Hauser, P. M. ed. (1958) Population and World Politics, Glencoe, [I]. The Free Press.

[19] Hervé Le Bras. (1991) Marianne et Lapins, olivier Orban.

[20] _____., (1994) Les Limites de la planète—Mythes de la nature et de la population,

Flammarion.

[21] Hodgson, D. (1988) Orthodoxy and Revisionism in American Demography P.D.R. vol. 14, no. 4.

[22] James, P. (1979) Population Malthus, His life and times. Routledge & Kegan Paul.

[23] Johnson, D. G. and R. D. Lee. (1987) Population Growth and Economic Development: Issues and Evidence. Madison; Univ. of Wisconsin Press.

[24] Keafitz. N. (1994) "Croissance démographique; Qui peut en évaluer les limites?" La Recherche 264, avril 1994, vol. 25.

[25] Kirk, D. (1944) "Population changes and the postwar world", American Sociological Review 9, no. 1.

[26] Kuznets, S. (1967) "Population and economic Growth", Proceedings of the American Philosophical Society, 111, no. 3.

[27] Leibenstein, H. (1969) "Pitfalls in benefit-cost analysis of birth prevention", Population Studies 23. no. 2.

[28] Malthus, T. R. (1798) An Essay on the principle of population, 1st. 1798, 6th, 1826.

[29] Mathieu, J. L. (1994) Les Grands problèmes de population, Que sais-je? P.U.F

[30] Meadow, D. H. and others. (1972) The Limits to growth, A Report for the Club of Romes, Project on the predicament of mankind.『成長の限界』ローマ・クラブ『人類の危機』レポート，D. H. メドウズ他著，大来佐武郎監訳，1972年。

[31] Meek, R. L. (1953) Marx and Engels on Malthus，ミーク編著『マルクス＝エンゲルス，マルサス批判』大島清，時永淑共訳，法政大学出版局，1995年。

[32] Notestein, F. W. (1945) "Population—The long view" in Food for the World, ed. Theodore W. Schultz. Univ. of Chicago Press.

[33] Petersen, W. (1979) Malthus, Harvard Univ. Press.

[34] Preston, S. H. (1987) "The Social Sciences and the Population problem", Sociological Forum 2, no. 4.

[35] Sauvy, A. (1963, 66) Théorie génerale de la population, P.U.F. 3 éd. 2 vols. 南亮三郎監訳「人口の一般理論」中央大学出版部，1985年。

[36] _____., (1982) Mondes en marche, Calman-Levy.

[37] _____., (1987) L'Europe submergée, Sud—Nord dans 30 ans, Dunod, Paris.

[38] Sax. K. (1955) Standing room only, The Challenge of overpopulation, Beacon Press, Boston.（書評；岡田實，『経商論纂』71号，1956年12月。）

[39] Schultz, T. P. (1987) "School expenditures and enrollments, 1960–80; The effects of income, prices and population growth" in Johnson and Lee.

[40] Simon, J. L. (1985) L'Homme, Notre dernière chance—Croissance démographique ressources naturelles et niveau de vie, P.U.F. The Ultimate Resource, Princeton Univ. Press.1981の仏訳。

[41] Simon, J. L. and Kahn, H. eds. (1984) The Resourceful earth: A Response to Global 2000 Basil Blackwell.

[42] Simon, J. L. (1990) Population matters, people, resources, environment and immigration. Transaction Publishers.

[43] Thompson, W. (1946) Population and Peace in the Pacific, Univ. of Cicago Press

[44] Timmer, C. P. Sirageldin, I. Kantner, J. and Preston, S. H. (1982) On Julian, L. Simon. The Ultimate Resource, P.D.R. vol. 8, no. 1. (Review Symposium)

[45] U.N.F.P.A. (1991) Population, resources and environment: the critical challenge, N. Y.

[46] Vidal, A. (1994) La Pensée démographique, Doctrines et politiques de population, Press Univ. de Grenoble.

[47] Vogt, W. (1948) Road to survival N. Y. sloane.

[48] Wilmoth, J. R. & Ball, P. (1992) "The Population debate in American popular magazines 1946–90" Population and Development Review, vol. 18, no. 4.

[49] 南亮三郎, 岡田實編 (1980年)『人口思想の形成と発展』千倉書房。